

厚生労働科学研究費補助金

がん臨床研究事業

WEB版がんよろず相談システムの構築と活用に関する研究

平成 19 年度～21 年度 総合研究報告書

研究代表者 山口 建

平成 22(2010)年 3 月

目 次

I.	総合研究報告	
	WE B版がんよろず相談システムの構築と活用に関する研究	1
	山口 建	
II.	研究成果の刊行に関する一覧表	
	雑誌：外国語	17
	雑誌：日本語	18
	書籍：日本語	26

総合研究報告書

研究課題名 WEB版がんよろず相談システムの構築と活用に関する研究

研究代表者 山口 建 静岡県立静岡がんセンター 総長

研究要旨

WEB版がんよろず相談システム(<http://cancerqa.scchr.jp>)は、がん患者や家族が抱く悩みや負担に答え、暮らしの支援をするためのウェブサイトで、患者や家族のみならず、がん診療連携拠点病院の相談支援センター、かかりつけ医、市町村・保健所・患者会・患者支援団体の相談窓口を担当する保健師やケア・コーディネータにとっても役立つシステムとして開発された。そして、2007年の公開後、利用状況を分析し、医療関係者、患者、家族、患者会などから寄せられた意見や評価をもとに、より適切で、患者一人ひとりのニーズに沿った情報の入手が可能なシステムを目標に改良を重ねている。

2007年度には、公開を始めたWEB版がんよろず相談の利用状況について分析を進め、内容の充実とともに、データベースとしての色彩が強いシステムを、より患者、家族が訪れやすいシステムとするための検討を進めた。

2008年度には、利用状況の分析結果に基づき、ウェブサイトのポータルサイト化ならびにSearch Engine Optimization (SEO、サーチエンジン最適化)対策を進め、さらに、静岡がんセンターよろず相談の「よろず相談データベース」を利用し、“在宅療養”、“医療連携”、“緩和ケア”、“がんの予防”、“がんを疑われた時期の悩みや負担”などについての情報を追加し、内容の充実を図った。加えて、全国のがんに関する医療相談の充実を目指して、静岡がんセンターのノウハウを集めた“がんよろず相談—担当者マニュアル・資料集2008”を作成し、全国のがん診療連携拠点病院の相談支援センター担当者や行政の保険福祉担当者、併せて計480カ所に提供するとともに、患者・家族のための小冊子類やDVDを配付した。

2009年度は、利用者が活用できるように、新たな二つのデータベースの構築を進めた。まず、利用者が初めての受診から診断時、治療中、治療終了後、経過観察時、再発・転移時、緩和ケアなど、病期に応じた悩みや助言を探しやすくするために、時系列にそった悩みや負担を追加した。また、利用者が自らのがんについて抱える問題に沿った悩みと助言の閲覧ができるように、8種類のがんについてデータベースを構築し、検索可能とした。

これらの改良が相まって、サイト利用者は毎月4万件余りとなり、公開年度の11倍まで増加し、リピーターの数も5倍程度と増加した。こうして、がん患者や家族の暮らしを支援する情報サイト、WEB版がんよろず相談システムは成長と進化を遂げ、我が国のがん対策に大きく貢献している。

研究分担者

山口 建	静岡県立静岡がんセンター 総長	谷尾 吉郎	地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪府立急性期・総合医療センター 主任部長
濃沼 信夫	東北大学 大学院 教授	加治 正英	富山県立中央病院 部長
山口 直人	東京女子医科大学 医学部 主任教授	望月 泉	岩手県立中央病院 副院長兼消化器外科長兼外科長
澤田 茂樹	独立行政法人国立病院機構 四国がんセンター	江上 格	公立阿伎留医療センター 部長
柴 光年	国保直営総合病院 君津中央病院 副院長	小切 匡史	市立岸和田市民病院 副院長兼外科部長

土屋 嘉昭	新潟県立がんセンター 新潟病院 部長	高橋 郁雄	松山赤十字病院 第2外科部長
田中屋 宏爾	独立行政法人国立病院機構 岩国医療センター 統括診療部長	野口 和典	大牟田市立総合病院 副院長兼研究研修部長兼内科部長
謝花 正信	松江市立病院 診療部長	渡辺 洋一	総合病院 岡山赤十字病院 副院長兼呼吸器内科部長兼 緩和ケア科部長
原 信介	佐世保市立総合病院 管理診療部長	井上 賢一	埼玉県立がんセンター 科長兼部長
石田 裕二	静岡県立静岡がんセンター 部長	奥原 秀盛	静岡県立大学 准教授
堀越 泰雄	静岡県立こども病院 室長	田代 英哉	大分県立病院 副院長兼がんセンター所長兼 外科部長
佐々木 常雄	がん・感染症センター 東京都立駒込病院 院長	宮永 太門 安達 勇	福井県立病院 静岡県立静岡がんセンター 部長
永井 宏和	独立行政法人国立病院機構 名古屋医療センター 臨床研究センター 部長	大田 洋二郎	静岡県立静岡がんセンター 部長
山本 英彦	飯塚病院 副院長兼呼吸器内科部長	田沼 明	静岡県立静岡がんセンター 部長
関口 勲	栃木県立がんセンター 第1病棟部長	石川 睦弓	静岡県立静岡がんセンター研究所 部長
大野 真司	独立行政法人国立病院機構 九州がんセンター 医長	吉田 隆子	日本大学短期大学部 教授
長井 吉清	宮城県立がんセンター研究所 部長	小池 真規子	目白大学 人間学部 教授
蓮見 勝	群馬県立がんセンター 部長	大野 ゆうこ	大阪大学大学院 教授
渡辺 敏	千葉県がんセンター 部長	青木 和恵	静岡県立静岡がんセンター 看護部長
坂井 隆	独立行政法人国立病院機構 三重中央医療センター 院長	稲野 利美	静岡県立静岡がんセンター 室長
山下 浩介	医療法人社団北北斗病院 部長	高田 由香	静岡県立静岡がんセンター 主幹
須賀 昭彦	静岡済生会総合病院 科長	大曲 睦恵	静岡県立静岡がんセンター研究所 技師
柏木 雄次郎	地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪府立成人病センター 主任部長	矢野篤次郎*1	佐賀県立病院好生館 部長
田伏 克惇	独立行政法人国立病院機構 大阪南医療センター 統括診療部長	坂本 茂 *2	飯塚病院 副院長兼部長
金岡 俊雄	日本赤十字社 和歌山医療センター 副部長	平山 功 *3	群馬県立がんセンター 部長
加藤 誠	成田赤十字病院 病院長	三橋 彰一*4	茨城県立中央病院 茨城県地域がんセンター 医長
龍沢 泰彦	石川県済生会金沢病院 部長	北村 有子*5	静岡県立静岡がんセンター研究所 主任
		細川 治 *6	福井県立病院健康診断センター センター長
		吉川 栄省*7	静岡県立静岡がんセンター 医長

柿川 房子*8 新潟県立看護大学
教授
服部 洋一*9 静岡県立静岡がんセンター研究所
技師

- *1 平成 19 年度 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日
- *2 平成 19 年度 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日
- *3 平成 19 年度 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日
- *4 平成 19 年度 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日
- *5 平成 19 年度 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日
- *6 平成 19 年度 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日
- *7 平成 19 年度 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日
- *8 平成 19 年度 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日
- *6 平成 20 年度 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日

A. 研究目的

がん患者や家族が必要とする情報には、その患者の病状に関する“診療情報”、疾病の治療・ケアに関する“医学情報”、患者・家族が抱える悩みや負担を解消するための“患者の暮らしを支援する情報”がある。“診療情報”は医療機関で患者に提供され、“医学情報”は書籍やウェブサイトにより一方向性に、また、“暮らしの支援情報”は医療技術者や医療相談などの対話を通じて提供されることが多い。このうち、暮らしの支援情報は、医療機関の相談窓口や電話相談でも提供されており、経験豊富なカウンセラーが相談に乗る場合には、それは理想的である。しかし、我が国の現状では相談窓口の整備は緒に就いたばかりであり、相談窓口の担当者にとっても、相談を進めるのに必要なマニュアル、情報、ツールの整備は十分とは言えない。

我々は、過去十年以上にわたって、がん患者や家族から悩みや負担を徹底して学び、それを解消するための手法について研究を進めるとともに、全国のがん診療連携拠点病院の相談支援センターのモデルとなった“がんよろず相談”を静岡がんセンターで運営してきた。

本研究では、そこで培われた患者支援のノウハウを、ウェブサイト上で公開し、全国に普及させるためのツールとしてのWEB版がんよろず相談システムの構築を目指している。このシステムは、患者や家族の悩みや負担の事例一万件を基本に、その一件一件に対する対応策並びに助言、書籍や冊子類、地域の医療福祉サービスへのアプローチ法などで構成され、国立がん研究センター等から発信される医学情報と併せて利用することで、患者や家族が正しい医学情報と有効な患者支援情報とを容易に手に入れることを可能にするものである。

WEB版がんよろず相談システムの利用者は患者や家族にとどまらない。がん診療連携拠点病院の相談支援センター、市町村や保健所の相談窓口、患者会・患者支援団体の“ケア・コーディネータ”なども重要な利用者である。相談に対応する医療技術者、保健師、ソーシャルワーカーは、一般の患者や家族への対応を熟知し、対話技術も心得ている。しかし、がん患者や家族に対するアドバイスの経験に乏しいことが積極的な対応を困難にしている。WEB版がんよろず相談システムは、正しい医療情報、患者・家族の疑問に対する回答、利用可能な地域医療福祉サービス、よりレベルの高い相談窓口などに関する情報等を提供することができる。また、かかりつけ医も重要な利用者である。これらの職種がWEB版がんよろず相談システムを活用することによって、情報提供とともに対話が生まれ、がん医療や情報提供に関する地域間格差の解消が期待される。

B. 研究方法

1) WEB版がんよろず相談システムの機能強化:

現在、公開されているWEB版がんよろず相談システムについて、研究者、患者会などで評価した結果を基に、高齢者が多く含まれるがん患者やその家族にとって使い勝手の良いシステムの構築に努めた。

まず、文字情報を中心としたデータベース型情報サイトであるWEB版がんよろず相談システムをポータルサイト化し、インターネット上のポータルサイトと同様なトップページにすることでより親しみやすいサイトの構築に努め、全国の患者・家族が気軽に訪れることのできるサイトを目指した。

また、訪問者の多くは検索エンジンから直接助言ページに訪れることが明らかとなったので、どのページから閲覧してもサイトのコンテンツ全体が把握できるように改良し、全国の患者・家族が気軽に訪れることのできるサイトを目指した。

2) WEB版がんよろず相談システムのコンテンツの熟成:

WEB版がんよろず相談サイトで提供されているがん患者や家族の悩みや負担の事例データベースは、「がん体験者の悩みや負担などに関する実態調査」に基づく二万数千件の悩みや負担を、重複を避けて一万件に整理したものがもとになっている。しかし、静岡がんセンターよろず相談の「よろず相談データベース」とこの

調査結果を比較すると、がん患者は、相談しやすい悩みと相談しにくい悩みを併せ持っていると考えられた。WEB で公開している事例データベースは、調査方法がアンケートであることから相談しにくい悩みが中心である。また、調査対象者は患者であり、家族の抱える家族独自の悩みや負担が含まれていない。

そこで、年間一万件余りの相談データが蓄積されつつある「よろず相談データベース」を参考に WEB 版がんよろず相談サイトのための「WEB 版用よろずデータベース」を構築し、サイトの悩みと助言に組み込むことにより、上記課題の改善を試みた。

これまでのアクセス解析では、検索エンジンやサイト内の検索質問に関して、病名や治療名、副作用症状や機能障害名などの医療情報に関する検索質問が多く、同時に検索質問には漠然と広い範囲の内容を表す単語が多い特徴がみられた。その一方で、閲覧された助言の上位を静岡分類別にみると、症状・副作用・後遺症、診断・治療に続いて、不安などのこころの問題、就労・経済的負担、家族・周囲の人との関係と、検索質問の上位にはほとんど出てこない分類項目が閲覧されていた。

さらに、対面相談・電話相談を実施しているよろず相談の相談内容をみると、ここ数年間で様々な媒体によるがんに関する情報提供のコンテンツは増加しているにもかかわらず、情報の整理ができないまま、すべての時期のあらゆる情報を求めようしたり、情報同士を関連づけられないまま、誤解したり様々な媒体にアプローチしている傾向がみられた。また、分担研究者や研究協力者である患者会・患者支援団体からは、がんの種類別での情報検索を望む声が以前からあったため、この点についても検討を加えた。

3) サイトリニューアル後の利用状況の評価

WEB サイト公開後、頻繁に閲覧される悩みや負担についての情報を得るとともに、使い勝手については、分担研究者である医療関係者、研究協力者の患者会・患者支援団体の意見を取り入れて、さらなる改良に努めた。そして、これらの意見や評価に基づき、提供する情報をさらに充実させ、並べ方についても工夫したりリニューアル版を公開し、併せて SEO(Search Engine Optimization、サーチエンジン最適化) 対策を施した。さらに、サイトリニューアル後の利用状況を分析し、今後の課題を検討した。また、リアルタイムの患者や家族の視点を重視したサイトにするために、利用状況の詳細な分析が

できるように保守点検システムとサイト内アンケートを強化した。

4) がん患者の悩みや負担に対する助言集の作成

本研究においては、WEB で公開している事例データベースの悩みや負担すべてに、対応策や助言を作成することを目指し、すでに作成された「医療費編・経済就労編」、「肝細胞がん編」、「抗がん剤治療・放射線治療と食事編」については、WEB 版がんよろず相談における一件一件の悩みや負担に対応した形で掲載し、さらに、「乳がん編」の作成を進めた。また、患者・家族への情報提供冊子である“学びの広場シリーズ”についても作成を進めた。

5) WEB 版がんよろず相談の活用マニュアルの配布と評価

医療技術者、相談支援センター担当者向けの“がんよろず相談一担当者マニュアル・資料集 2008”を作成し、静岡がんセンターの患者・家族用情報コーナーで展示している小冊子類、DVD などの情報提供ツールとともに、全国のがん診療連携拠点病院相談支援センター担当者、行政の保健福祉担当者など（計 480 カ所）に配布した。

本システムの利用者として、患者・家族、医療技術者、相談支援センター担当者、診療所、行政の福祉担当者、社会でがん医療に関わる人々などが想定されている。配布先の相談支援センター担当者を対象に、アンケートを実施し、マニュアル評価を行った。

6) 小児の悩みや負担についての対応

今後の新しい課題として、小児がんの患者あるいは親をがんで失った小児のケアの重要性について、全国の病院に勤務するチャイルド・ライフ・スペシャリストによる意見交換を行い、がんの病院医療において、彼らが果たす役割を検討した。

(倫理面への配慮)

本年度の研究においては、研究対象者に対する危険性を生じる状況は想定されていない。

C. 研究結果

1) WEB 版がんよろず相談システムの機能強化

WEB 版がんよろず相談のウェブサイトについて、ページが開かれた時点でそのページ内の情報が一目でわかるようなデザインの工夫、トップページ以外からアクセスされた場合であっ

てもコンテンツの全体を把握し適切な閲覧を支援できるように改良された。

ページ閲覧の年次推移をみると、がん患者の悩みや負担の閲覧が以前と変わらず3/4を占め、各市町の医療福祉サービス窓口の閲覧がそれに次いだ。閲覧された助言の上位を静岡分類別にみると、症状・副作用・後遺症 155,191 回 (36.2%)、診断・治療 62,088 回 (14.5%)、不安などのこころの問題 48,722 回 (11.4%) である。また、家族・周囲の人との関係、就労・経済的負担と、こころの問題、人との関わり、生活など検索質問の上位にはほとんど出てこない分類項目が閲覧されていた。

検索方法としては、静岡分類から探す方法がもっとも用いられていて、続いてキーワードから探す方法、検索ソフトを使って入力して探す方法の順であった。

2) WEB 版がんよろず相談システムのコンテンツの熟成

患者や家族など一般の利用者は、現在直面している悩みや負担、あるいはその問題に関連した情報を整理し、絞り込んで入手することに不慣れであることから、情報の絞り込みや具体化、個別化をサポートするための新たなコンテンツや機能の追加を行った。

具体的には、利用者が病期にそって悩みと助言を探しやすくするために、「経過にそった悩み」を追加した。6つの病期(①初めての受診、②診断、治療の説明、③最初の治療、④再発・転移したとき、⑤治療が終わったら、⑥緩和ケアって何)を選択すると、病期にあわせ、医療、生活、こころ、人との関わり等多様な側面に関連したキーワードとなる言葉が並び、キーワードを選択するとキーワードにそった助言、さらに関連する情報として、サイト内の関連情報(関連する冊子や県内市町の情報)、外部サイトの役立つリンク集を表示した。

がんの種類別の悩みや負担に関するデータベースは、公開時から、研究者や患者支援団体などの研究協力者から要望があったが、インターネットで公開するにあたり、2万6千件の悩みや負担を類似した項目に集約し、1万件余りに整理し、さらにその1万件に基づき助言作成を実施しているため、全体のデータベースのみ公開となっていた。しかし、検索エンジン、サイト内検索に入力された検索質問の内容をみていくと、利用者が情報を検索する際、原発部位を始点とする傾向が1つの特徴としてみられた。そこで、罹患者の多いがんを中心に、がんの種類別のデータベース公開を検討した結

果、全体のデータベースとは別に、がんの種類別のデータベースを新たに構築し、8つのがん種別データベースを公開することができた。

8つのがんの種類とは、5大がん(乳がん、胃がん、大腸がん、肺がん、肝臓がん)に子宮がん、卵巣・卵管がん、前立腺がんであるが、これに全体のデータベースを加え、総計9つのがん種について悩みと負担のデータベースを公開した。がんの種類別のデータベースの構築に当たっては、アンケート調査で収集した2万6千件の悩みや負担から、8つの原発部位に属する悩みや負担を抽出し、さらにそれぞれの悩みや負担1つ1つに紐付いている悩みや負担をまとめた文章と助言も同様に紐付けた状態で抽出し、新たに8つのがんの種類別データベースとした。がんの種類別データベースを公開することで、同じ病名のがん体験者の悩みを共有し、助言を閲覧することが可能となった。

3) ウェブサイト改良後の利用状況の評価

全国の医療相談担当者、研究者、患者団体などの意見に基づき、SEO(Search Engine Optimization)対策、提供する情報の充実、探しやすいレイアウトの工夫により、WEB版がんよろず相談の改良版では、利用者が目的とする情報に容易に到達することが容易となった。この結果、サイト利用者は毎月4万件余りと公開年度の11倍まで増加し、リピーターの数も5倍程度となり、増加傾向にある。

アクセス解析による評価に関しては、アクセス解析ソフト(AWSTATS, Google Analytics)による解析と、サイト内コンテンツのデータベース構築時に準備した日報・月報の集計を中心に行っていたが、より具体的な解析が可能になるように、日報・月報項目を追加し、サイト内アンケートに関しても改善を行った。

公開当初、サイト全体に対する利用者からの意見や評価のための簡便なアンケート(自由記載欄含む)を準備していたが、別ページに準備した全体評価アンケートは回答が少なく、さらに自由記載欄の記載内容の多くは、悩みや負担と助言ページの内容に関する事柄であった。そこで、一番閲覧者の多い悩みや負担と助言の各ページの最後に、助言が役立ったかどうかの5段階の選択式評価、属性、自由記載欄の簡易アンケートを配置した。2008年度1年間の状況としては、サイト全体への意見数24件、助言評価数579件で、助言ページへのアンケート配置は、アンケート回答件数を増加させたと思われる。

アンケート自由記載欄の具体的な意見や評価、ページ内容ごとの評価の差異などは今後のサイト運用や展開に役に立つと考えられたため、他のコンテンツページの評価も加える形で、アンケート、集計等に改良を加えた。

評価アンケートは、助言ページ以外に、経過にそった悩み(時系列にそった悩み)のページ、静岡県内情報のページに、それぞれ配置した。アンケートの属性項目には、「患者、家族、医療関係者、その他」に「行政関係者」を加え、これまで通り選択式とした。評価は助言のページ評価と同様、「このページが役立ったかどうか」という設問で5段階選択式ボタンとし、自由記載欄をその下に配置した。また、部位別データベースごとのアクセス数が見えるように運用保守の集計を追加した。

4) がん患者の悩みや負担に対する助言集の作成

本研究においては、ウェブサイトで公開している事例データベースの悩みや負担すべてに、対応策や助言を作成することを目指している。すでに、「医療費編・経済就労編」、「肝細胞がん編」、「抗がん剤治療・放射線治療と食事編」、「乳がん編(1)」、「乳がん編(2)」、「乳がん編(3)」を作成し、ウェブサイトに掲載した。また、患者・家族への情報提供冊子である“学びの広場シリーズ”についても、“緩和ケアとは”、“痛みをやわらげる方法”、“患者・家族のコミュニケーション”、“がんと上手につきあう方法”の4種類を作成し、1万4千部を全国の拠点病院などに配布し、WEB版がんよろず相談サイトにも掲載した。

5) WEB版がんよろず相談の活用マニュアルの配布と評価

医療技術者、相談支援センター担当者向けの“がんよろず相談—担当者マニュアル・資料集2008”を作成し、静岡がんセンターの患者・家族用情報コーナーで展示している小冊子類、DVDなどの情報提供ツールとともに、全国のがん診療連携拠点病院相談支援センター担当者、行政の保健福祉担当者など(計480カ所)に配布した。

配布先の相談支援センター担当者(360施設)を対象に、アンケートを行った結果、相談員自身が資料・情報を求めている状況のなか、インターネット活用は役立っていること、リーフレットなどのダウンロード機能に関する意見などが寄せられた。

6) 小児の悩みや負担についての対応

小児がん患者あるいは親をがんでなくした子どもたちのケアにおけるチャイルド・ライフ・スペシャリストの役割について検討し、病院医療における重要性を確認した。

D. 考察

1) WEB版がんよろず相談の意義

WEB版がんよろず相談システムの意義は、第一に、がん患者らが求める心のケアや医療相談、さらには暮らしの支援への要望などについて、患者らが内容を明確に整理できること、第二に、医療従事者・行政担当者・患者会・患者支援団体が、がん患者や家族の悩みや負担の実態を知り、その解決方法を探り、より精度の高い対応を可能にすること、第三に、同様な情報を、患者体験談として患者・生存者・家族らに提供し、悩みの軽減に役立てること、第四に、患者のニーズに答える新しいがん患者支援システムの整備や新しい医療用具などの開発に役立てることなどである。

「がん体験者の悩みや負担などに関する実態調査」結果に基づいた約一万件のがん患者の悩みや負担の事例データベースに加え、静岡がんセンターの相談窓口よろず相談で毎年1万件余りの事例が蓄積されつつあるよろず相談データベースから抽出した事例データベースを公開していくことで、がんの予防から終末期までの様々な局面、多様な視点におけるがん患者や家族の悩みや負担の全体像がさらに明確になった。これは、従来、評価が困難とされていた患者や家族の悩みや負担を科学的に分析するために重要である。

2) サイト公開後の利用状況の評価

SEO対策後のWEB版がんよろず相談の利用状況をみると、利用者は急激に増加し、検索エンジン経由の利用者が訪問件数全体のなかの約8割を占めていることが明らかになった。これは、インターネットを通じてがん関連情報を提供する際のSEO対策の重要性を示している。また、本サイトは、分担研究者や研究協力者からの意見・評価、アクセス解析、サイト内アンケート結果に基づき、年1回のリニューアル、機能強化、コンテンツ追加を実施しており、その効果は、SEO対策と相まって、利用者数の順調な増加に寄与している。以上のことから、リアルタイムの意見や評価にそって、使いやすくわかりやすいサイト運用のためには細部にわたる改良が重要であると考えられた。

アクセス解析から検索エンジンやサイト内の検索質問内容をみると、病名や治療名、副作用症状や機能障害名などの医療情報に関する検索質問が多く、同時に検索質問では漠然と広い範囲の内容を表す単語が用いられる傾向がみられた。その一方で、閲覧された助言の上位を静岡分類別にみると、症状・副作用・後遺症、診断・治療に続いて、不安などのこのころの問題、就労・経済的負担、家族・周囲の人との関係と、検索質問の上位にはほとんど出てこない分類項目が閲覧され、多様な悩みや負担の事例へのアクセスが確認された。さらに、助言ページのアンケートの評価では、どの分類項目に関しても、7～8割が肯定的な評価であり、インターネットにおいても、生活、このころ、人との関わりに関連した情報へのニーズが存在していることが示唆された。

がん患者や家族の情報入手に関していえば、よろず相談窓口における相談内容やインターネットによる情報ツールであるWEB版がんよろず相談の検索質問での特徴をみると、情報の整理ができないまま、自らの病期とは異なる時期のあらゆる情報を求めようしたり、情報同士を関連づけられないまま誤解したり、様々な媒体にアプローチしている傾向がみられた。

今後、WEB版がんよろず相談などの一方性のインターネット情報ツールでは、患者・家族側のあいまいなニーズをもとに、システムの誘導機能により、求めている情報に到達できるような仕組みの整備が必要である。たとえば、利用者が示したキーワードから、関連がありそうな情報を選択し、利用者に提示し、そこからさらに関連する情報が選別され、必要な情報に近づいていくような仕組みである。本WEB版がんよろず相談は、数度にわたる改良の結果、そのような機能を持ち始めている。

3) がん患者の悩みや負担に対する助言集の作成

高齢者やインターネットに不慣れながん患者や家族への情報提供として、WEB版がんよろず相談とともに、冊子作成も継続して行う必要がある。高齢者にとっては、これらの紙情報は有用であり、さらに、紙情報とWEB版がんよろず相談とが相まって、患者や家族の悩みや負担を軽減させることができる。

4) WEB版がんよろず相談の活用マニュアルの配布と評価

相談支援センター担当者らは、本システムと患者・家族をつなぐ存在であり、様々な対象に周知することで、がん患者や家族への適切な情

報提供ができると考える。また、本システムは、相談支援センター担当者の相談対応ツールとしても有効であり、相談員の対応力の向上が期待できる。要望をもとに、コンテンツの充実に向けて、機能強化をはかっていく必要がある。

5) 小児の悩みや負担についての検討

今後の新しい課題として、小児がんの患者あるいは親をがんで失った小児のケアの病院医療における役割について検討し、その重要性を確認した。今後、多数の症例についてのデータベースを構築し、必要な対応策を確立する必要がある。

E. 結論

WEB版がんよろず相談システムは、2007年度の公開以来、利用状況を分析しながら、改良を重ねてきた。その分析結果によれば、情報の質や利用者側の知識や能力不足により、適切な情報入手できない現実が見えてきた。そこで、システムのポータルサイト化を図るとともに、がんの種類別に整理した悩みと負担のデータベースを追加し、さらに、患者の病期別に整理したコンテンツというツールを新たに作成し、情報検索の入り口に追加した。これらの改良の結果、サイト利用者は毎月4万件余りと公開年度の11倍まで増加し、リピーターの数も5倍程度となり、現在も増加傾向を続けている。

こうしてWEB版がんよろず相談は、がん患者・家族の悩みや負担の全貌を知り、助言集を提供すると共に、生活支援のための情報、患者図書館情報、医療福祉サービス情報をも含む、患者・家族のみならずがん診療連携拠点病院、医療機関、行政の健康福祉担当者にとっても強力な武器へと成長と進化を遂げつつある。

F. 健康危険情報

現時点では、患者、家族と接触することが無く、明らかな健康危険情報はない。

G. 研究発表

1. 論文発表

雑誌 (外国語)

- Hyodo I, Adachi I, et al., Development of a predicting tool for survival of terminally ill, cancer patients, Jpn J clin oncol, 2-7, 2010.

2. Nagai, Y., et al. The influence of informing patients about cancer on their quality of life in gastric, lung, and colorectal cancer patients in Japan. Quality of Life Research, Abstract presented at the 16th Annual Conference of the International Society for Quality of Life Research, A-96, 2009.
 3. Morita T, Suga A, et al. Meaninglessness in terminally ill cancer patients: a randomized controlled study. J Pain Symptom Manage. 37:649-58, 2009.
 4. Takeuchi H, Muto Y, Tashiro H., Clinicopathological characteristics of recurrence more than 10 years after surgery in patients with breast carcinoma., Anticancer Res, 29: 3445-3448, 2009.
 5. Kobayashi K, Yamaguchi K, et al., Effects of socioeconomic factors and cancer survivors' worries on their quality of life (QOL) in Japan. Psycho-Oncology, 17:606-611, 2008.
 6. Miyashita M, Adachi I., Nurse views of the adequacy of decision making and nurse distress regarding artificial hydration for terminally ill cancer patients: A nationwide survey, Amer J Hospice & Palliative Med, 24: 463-469, 2008.
 7. Yamaguchi K, et al. Cancer patients' distresses and inquiries - proposal of four-level classification based on consultation service and questionnaire survey. Cancer Sci. 98:612-616, 2007.
 8. Miyashita M, Adachi I., Physician and nurse attitudes toward artificial hydration for terminally ill cancer patients in Japan results of 2 nationwide surveys, Amer J Hospice & Palliative Med, 24: 383-389, 2007.
 9. Inagaki M, Yoshikawa E, et al. Smaller regional volumes of brain gray and white matter demonstrated in breast cancer survivors exposed to adjuvant chemotherapy. Cancer, 109:146-156, 2007.
 10. Inagaki M, Yoshikawa E, et al. Regional cerebral glucose metabolism in patients with secondary depressive episodes after fatal pancreatic cancer diagnosis. J Affect Disord, 99:231-236, 2007.
 11. Ito, Y., Ohno, Y., et al., Cancer survival trends in Osaka, Japan: the influence of age and stage at diagnosis, Jpn J Clin Oncol., 37:452-458, 2007.
- 雑誌(日本語)
1. 山口建、高度先進医療・患者視点の重視を両話に「地域に根差した病院」を実現、がん治療最前線、67:3-7、2010
 2. 永井宏和、難治性悪性リンパ腫の治療戦略—再発・治療抵抗性濾胞性リンパ腫、血液フロンティア、20:21-28、2010
 3. 永井宏和、リツキシマブ導入後のB細胞性腫瘍治療—未治療B細胞性リンパ腫治療におけるリツキシマブの有用性：国内一般診療データに基づく検討、血液・腫瘍科、60:6-10、2010
 4. 東さやか、森本茂文、田伏克惇、他、TS-1適正使用確認システムの構築とその応用、癌と化学療法、37:469-472、2010
 5. 安達勇、他、末期がんだけではない「緩和ケア」は、ここまで進化した、ナーシング・カレッジ、2:44-50、2010
 6. 安達勇、本山清美、外来がん化学療法患者に対する緩和ケア、がん患者と対症療法、2:33-39、2010
 7. 山口建、多職種チームの医療の実践、Oncology Network、2:3、2009
 8. 山口建、がん医療現場でのQuality improvementを考える—患者参加型医療への対応—、安全医学、5:5-11、2009
 9. 濃沼信夫、介護予防の評価。医療経済学・政策学の視点から、公衆衛生、73:286-289、2009
 10. 濃沼信夫、がん検診の現状と問題点、日本医師会雑誌、138:43-46、2009
 11. 濃沼信夫、胃癌撲滅戦略による経済効果、Helicobacter Research、13:380-384、2009
 12. 濃沼信夫、分子標的薬の医療経済、日癌治、44:232、2009
 13. 濃沼信夫、胃癌の医療経済、The Forefront、5:33-36、2009
 14. 濃沼信夫、がん診療の医療経済学。がん薬物療法学 基礎臨床研究のアップデート、日本臨床、67:17-24、2009

15. 大友理恵子、柴光年、他、化学療法中の食欲不振患者への食事援助—化学療法食を考案して—、全自病協雑誌、48:116-119、2009
16. 望月泉、がんの病診連携、治療、91: 2382-2388、2009
17. 松山円、石田裕二、大曲睦恵、他、【病児のきょうだい支援】看護支援の実際 自宅から離れた場所で治療を受ける患児のきょうだいへの説明、小児看護、32:1316-1322、2009
18. 石田裕二、大曲睦恵、他、family-centered-careを目指してのチーム医療：チャイルドライフスペシャリストと小児科医の連携』、日本小児科学会誌、110:134、2009
19. 佐々木常雄、生と死を見つめて、Modern Physician、29:1501-1504、2009
20. 佐々木常雄、終末期における心のバトン、訪問看護と介護、4:366-371、2009
21. 佐々木常雄、医療のピットフォール がん緩和医療での告知とインフォームドコンセント（解説）、治療学、43:441-443、2009
22. 小西敏郎、佐々木常雄、アンケート調査からみた再発・進行がん患者の疼痛管理における主治医の役割の重要性、癌と化学療法、36:453-460、2009
23. 佐々木常雄、都道府県がん・地域がん診療連携拠点病院、日本臨床、67:544-549、2009
24. 永井宏和、リンパ系腫瘍—新WHO分類（第4版）はどのように変わったか—成熟B細胞、腫瘍臨床血液、50:244-252、2009
25. 味澤篤、永井宏和、他、エイズ関連非ホジキンリンパ腫(ARHL)治療の手引き Ver 1.0、日本エイズ学会誌、11:108-120、2009
26. 永井宏和、悪性リンパ腫治療の進歩—限局期症例は治癒可能か、Current Therapy、27:23-26、2009
27. 片岡明美、大野真司、30歳以下の若年性乳癌の臨床病理学的解析と結婚・出産に関する検討、乳癌の臨床、24:39-42、2009
28. 中村吉昭、大野真司、他、外来がん化学療法におけるチーム医療と外科、臨床外科、64:1225-1233、2009
29. 長井吉清、他、病名告知のクオリティオブライフへの影響、癌の臨床、55:389-393、2009
30. 上田由喜子、長井吉清、他、がん患者の希望に関する意識構造、Health Sciences、25:212、2009
31. 細川治、宮永太門、他、早期胃癌診断の現状、胃と腸、44:455-464、2009
32. 大田洋二郎、がん患者を支える口腔ケアと歯科治療、The Quintessence、28:146-157、2009
33. 大田洋二郎、上野尚雄、外来治療を受ける患者への口腔ケアの重要性、外来看護最前線、14:66-76、2009
34. 大田洋二郎、がん患者さんも安心して使える口腔ケア商品、消化器外科NURSING、14:4-7、2009
35. 大田洋二郎、がん患者への口腔ケアの実践、訪問看護と介護、14:912-916、2009
36. 大田洋二郎、がん患者を地域で支える医科・歯科連携の実際、地域連携network、2:112-118、2009
37. 小池眞規子、病む子どもの傍らで、臨床心理学、9:341-345、2009
38. 稲野利美、静岡県立静岡がんセンターにおける取組み 自己管理力向上をめざして：栄養士の立場から、医学のあゆみ、231:1203-1209、2009
39. 山口建、家庭医によるがん対策—疾病管理と社会学の立場から—、治療、90:6-13、2008
40. 山口建、がん診療連携拠点病院とは？、治療、90:123-130、2008
41. 影山武司、山口建、他、地域におけるがん検診の実態調査、治療、90:75-79、2008
42. 山崎むつみ、山口建、他、家庭医のためのがん情報収集法—インターネットを中心に—、治療、90:137-143、2008
43. 石川睦弓、山口建、他、患者・家族のためのがん情報収集法、治療、90:145-150、2008
44. 堀内智子、山口建、他、暮らしのための医療福祉サービス、治療、90:151-156、2008
45. 山口建、堀内智子、がん診療連携拠点病院の現状と課題、保健医療科学、57:318-326、2008
46. 福地智巴、山口建、他、医師と患者・家族のコミュニケーション術、治療、90:157-162、2008
47. 山口建、医学は科学、医療は物語—理想のがん医療を目指して—、臨床血液、49:215-223、2008
48. 山口直人、がん検診の医療経済学、治療、90:169-173、2008
49. 望月泉、がん早期発見術 大腸(結腸・直腸)のがん、治療、90:25-30、2008

50. 佐々木常雄、がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第9回 患者はどのように最期を過ごしたいのか～がん終末期医療のあり方を考える～、エキスパートナース、24:174-175、2008
51. 佐々木常雄、がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第10回 マニュアル時代の「型どおりの死」、エキスパートナース、24:182-183、2008
52. 佐々木常雄、がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第11回 死の恐怖を乗り越える術、エキスパートナース、24:166-167、2008
53. 佐々木常雄、がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第12回 死とは一魂は残る、エキスパートナース、24:160-161、2008
54. 佐々木常雄、がん化学療法のあり方 腫瘍内科医の立場から、癌の臨床、54:247-252、2008
55. 永井宏和、低悪性度B細胞性リンパ腫に対する標準的治療戦略 血液・腫瘍科、56:1-6、2008
56. 永井宏和、再発または難治性多発性骨髄腫におけるレナリドマイドの役割、医薬ジャーナル、44:113-118、2008
57. 永井宏和、濾胞性リンパ腫-悪性リンパ腫 update in2008、内科、102:293-299、2008
58. 岡田誠治、永井宏和、他、エイズ関連リンパ腫の現状と治療戦略、臨床血液、49:206-214、2008
59. 大野真司、他、がん診療にかかわる適切な情報取得とコミュニケーション、medicina、45:1390-1392、2008
60. 大野真司、大島彰、サージカルオンコロジストのためのサイコオンコロジー、Pharma Medica、26:117-123、2008
61. 大野真司、他、多職種から多施設へと広がる乳癌チーム医療、CANCER BOARD 乳癌、1:51-54、2008
62. 長井吉清、他、胃癌患者に対する病名告知のあり方について-QOLからみた「仄めかし」と「病名のみ」の違いについて、日本癌治療学会誌、46:466、2008
63. 坂本茂、肝細胞癌 膵癌 胆嚢癌 高リスク患者の拾い上げと早期診断、治療、90:18-24、2008
64. 山下浩介、がん患者の在宅医療の現状と課題、治療、90:163-168、2008
65. 柏木雄次郎、他、がん患者の心身苦痛と緩和ケアへの理解・需要～患者アンケートから～、心療内科、12:73-79、2008
66. 金岡俊雄、泌尿器癌(膀胱癌、前立腺癌、腎臓癌)ー血尿といわれたらー、治療、南山堂、90:45-49、2008
67. 安達勇、がん化学療法における緩和医療科医師の役割、ナーシング・トゥデイ、23:58-62、2008
68. 吉川栄省、安達勇、終末期鎮静に関する倫理と精神科医の役割について、総合病院精神医学、20:272-278、2008
69. 上野尚雄、大田洋二郎、口臭のメカニズムとケアの選択、がん患者と対症療法、19:34-39、2008
70. 大田洋二郎、終末期に直面する口腔症状に対するケア、訪問看護と介護、3:892-896、2008
71. 大田洋二郎、がん治療と口腔ケア、がん治療における口腔ケアの意義と歯科の役割、歯科臨床研究、5、2008
72. 増野浩二郎、田代英哉、他、乳癌術後補助療法としてのTC療法の認容生の検討、日本臨床外科学会誌、69:5、2008
73. 青木(大曲)睦恵、こどものこころに寄り添うこと、緩和ケア、18:28-32、2008
74. 山口建、振り返らずに一歩ずつーがんの社会学を实践して、日本医事新報、4336、1、2007
75. 濃沼信夫、がん医療のコスト・パフォーマンス、月刊基金、48:3-5、2007
76. 濃沼信夫、がん医療にみる健康と経済、Geriat.Med、45:577-581、2007
77. 石田裕二、『family-centered-careを目指してのチーム医療：チャイルドライフスペシャリストと小児科医の連携』：静岡がんセンター小児科、日本小児科学会誌、110:134、2007
78. 佐々木常雄、がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第1回 桜の木の下で、エキスパートナース、23、5:116-117、2007
79. 佐々木常雄、がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第2回 若いがん患者の死に「受容」はありえない、エキスパートナース、23、7:190-191、2007
80. 佐々木常雄、がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第3回 「あと一週間の命です」、エキスパートナース、23、9:190-191、2007

81. 佐々木常雄、がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第4回 「緩和に徹する」ということ、エキスパートナース、23、10：128-129、2007
 82. 佐々木常雄、がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第5回 病名を知らずにふたりは・・・、エキスパートナース、23、11：106-107、2007
 83. 佐々木常雄、がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第6回 「一緒にがんばってみましょう」、エキスパートナース、23、12：174-175、2007
 84. 佐々木常雄、がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第7回 「花おりおり」の記事、エキスパートナース、23、13：182-183、2007
 85. 佐々木常雄、がん患者のターミナル あなたに伝えたいエピソード 第8回 死へ向かう「1つひとつのけじめ」～自宅で臨終簡素なお別れ 海へ散骨～、エキスパートナース、23、15：182-183、2007
 86. 永井宏和、濾胞性リンパ腫に対するリツキシマブの維持療法 血液・腫瘍科、54:732-736、2007
 87. 永井宏和、がん診療の最前線—ホジキンリンパ腫—最新医学、67:1329-1340、2007
 88. 大野真司、他、外来化学療法におけるチーム医療、臨床外科、62：619-625、2007
 89. 片岡明美、大野真司、他、乳癌患者の全人的医療の実践、日本臨床、65：617-621、2007
 90. 増田慎三、大野真司、他、乳癌周術期化学療法の現状およびSupportive Careの工夫、癌と化学療法、34: 1609-1615、2007
 91. 長井吉清、他、病名告知のQOLへの影響、日本癌治療学会誌、42：416、2007
 92. 林裕之、細川治、他、術後腓液瘻に対するステント留置-腓体尾部切除後の術後腓液瘻に対する内視鏡的内瘻術の経験—、消化器内視鏡、19：1731-1735、2007
 93. 須賀昭彦、看取りの症状緩和パス：疼痛、緩和医療学、9：23-28、2007
 94. 龍沢泰彦、当院緩和ケア病棟の現状と課題、癌の臨床、53：161-165、2007
 95. 井上賢一、進行・再発乳がんの薬物療法、看護技術、53：25-27、2007
 96. 井上賢一、乳癌、薬局、58:1773-1789、2007
 97. 小坂美智代、奥原秀盛、他、緩和ケア病棟における家族を対象としたサポートグループでの語りの様相、がん看護学会誌、21:14-30、2007
 98. 奥原秀盛、死の受容過程理論、ナーシング、27:166-172、2007
 99. 奥原秀盛、海外がん看護事情—アイルランド・英国のがん患者サポート事情—、がん看護、12:454-456、2007
 100. 安達勇、他、終末期がん患者に対する輸液ガイドライン：概念的枠組み、緩和ケア、17：186-188、2007
 101. 安達勇、緩和医療と補中益気湯などの漢方医療、漢方医学、31：13-15、2007
 102. 石本寛人、安達勇、疼痛対策、がん看護、12：611-614、2007
 103. 安達勇、モルヒネに誘発されるせん妄対策、日本医事新法、4364：95-96、2007
 104. 大庭章、吉川栄省、がん患者との基本的なコミュニケーション、腫瘍内科、1：317-321、2007
 105. 大庭章、吉川栄省、がん患者への精神療法の実践、日本臨床、65：123-127、2007
 106. 吉川栄省、大庭章、精神症状に対する緩和ケア、外科治療、96：942-947、2007
 107. 大田洋二郎、内藤克美、望月亮、病院連携の実例 急性期治療後のメンテナンスと医療連携、歯界展望、884：178-185、2007
 108. 田村恵美子、柿川房子、乳がん治療における生活障害を持つ患者に対する支援モデル開発に関する研究、日本医療マネジメント学会、8：164、2007
 109. 石川睦弓、北村有子、他、インターネットによる情報提供・情報発信ツール「Web版がんよろず相談Q&A」の試み（第1報）—日本語自由文あいまい語検索システムの開発—、医療情報学、27:1201-1202、2007
 110. 北村有子、石川睦弓、他、インターネットによる情報提供・情報発信ツール「Web版がんよろず相談Q&A」の試み（第2報）—相談内容の分析—、医療情報学、27:1203-1204、2007
 111. 大曲睦恵、日本におけるチャイルド・ライフ・スペシャリストの展望、JAHMC、12：28-31、2007
- 書籍(日本語)
1. 山口建、他（「がんの社会学」に関する合同研究班）、「がんよろず相談 Q&A 第6集 乳がん編③」、静岡がんセンター（編）、2010
 2. 山口建、がんの社会学と患者支援、がん看護 BOOKS がん看護研修マニュアル、静岡がんセンター（編）、南江堂、東京都、2010

3. 山口建、がん対策の総合的戦略—予防・検診・受診・情報—、がん看護 BOOKS がん看護研修マニュアル、静岡がんセンター（編）、南江堂、東京都、2010
4. 石川睦弓、北村有子、患者・家族支援、がん看護 BOOKS がん看護研修マニュアル、静岡がんセンター（編）、南江堂、東京都、19-22、2010
5. 高田由香、セカンドオピニオン、がん看護 BOOKS がん看護研修マニュアル、静岡がんセンター（編）、南江堂、東京都、29-30、2010
6. 青木和恵、褥瘡ケア、がん看護 BOOKS がん看護研修マニュアル、静岡がんセンター（編）、南江堂、東京都、255-259、2010
7. 稲野利美、栄養管理、がん看護 BOOKS がん看護研修マニュアル、静岡がんセンター（編）、南江堂、東京都、204-213、2010
8. 山口建、急増する患者。がんの2015年問題にどう立ち向かうか、がんを生き抜くための指南書、蔭書房、東京都、73-86、2010
9. 濃沼信夫、大腸癌治療の費用効果、大腸癌診療で知っておきたい医療経済 大腸疾患NOW2010、武藤徹一郎（監）、日本メディカルセンター、東京都、81-87、2010
10. 濃沼信夫、がんの医療経済、新しい診断と治療のABC「胃癌（改訂2版）」、最新医学社、大阪府、236-244、2010
11. 永井宏和、骨髄腫 annual report 2009、「日本人再発難治多発性骨髄腫におけるレナリミド国内臨床試験について」、日本骨髄腫研究会（編）、日本骨髄腫研究会、愛知県、14-19、2010
12. 坂下義彦、渡辺敏、がん診療連携拠点病院としての活動 緩和医療センター、がん診療ハンドブック第2版、木村秀樹（編）、永井書店、大阪府、2010
13. 小池眞規子、人生半ばで大病に罹ること、岡本祐子（編）、成人発達臨床心理学、ナカニシヤ出版、京都府、298-305、2010
14. 山口建、がんよろず相談（相談支援センター）の取り組みと役割、がん医療入門、朝倉書店、東京都、218-225、2009
15. 山口建、「がんの社会学」を目指して、医の倫理・シリーズ講演会 よい医師になる、日本医学出版、東京都、93-111、2009
16. 佐々木常雄、がんを生きる 主治医から余命を告げられたらどうすればいいか、講談社、東京都、2009
17. 永井宏和、低悪性度非ホジキンリンパ腫、現場で役立つ血液腫瘍治療プロトコール集、直江知樹（編）、医薬ジャーナル社、大阪府、98-113、2009
18. 永井宏和、びまん性大細胞型B細胞リンパ腫は、胚中心B細胞(GCB)と活性型B細胞(ABC)型で治療方針をかえるべきか？、2010-2011 EBM 血液疾患の治療、金倉謙・木崎昌弘・他（編）、中外医学社、東京都、301-306、2009
19. 永井宏和、ホジキンリンパ腫—限局期ホジキンリンパ腫、悪性リンパ腫治療マニュアル、飛内賢正・堀田知光・木下朝博（編）、南江堂、東京都、177-181、2009
20. 永井宏和、病気のひろがり（臨床病期）、インフォームドコンセントのための図説シリーズ「悪性リンパ腫」改訂版、堀田知光（編）、医薬ジャーナル、大阪府、20-23、2009
21. 重松英朗、中村吉昭、大野真司、ホルモン感受性乳癌に対する治療、乳癌テーラーメイド治療の理論と実践、稲治英生（編）、金原出版、東京都、2009
22. 森恵美子、重松英朗、大野真司、術前後化学療法のかえり、みんなに役立つ乳癌の基礎と臨床、戸井雅和（編）、医薬ジャーナル社、大阪府、2009
23. 山下浩介、がん患者・家族のサポート、北海道、2009
24. 須賀昭彦、厄介な痛み（その1） 神経障害性疼痛、チャレンジ！在宅がん緩和ケア、平原佐斗司・茅根義和（編）、南山堂、東京都、2009
25. 柏木雄次郎、がんの痛みを和らげる（疼痛緩和）、がんを治すチカラ、大阪府立成人病センター（編）、毎日新聞社、東京都、176-177、2009
26. 柏木雄次郎、がんの初期から始まる緩和ケア、がんを治すチカラ、大阪府立成人病センター（編）、毎日新聞社、東京都、180-181、2009
27. 柏木雄次郎、がん患者さんのメンタルケア、がんを治すチカラ、大阪府立成人病センター（編）、毎日新聞社、東京都、182-183、2009
28. 柏木雄次郎、緩和・精神ケアとがん看護、ここが知りたい—がん診療 Q&A、大阪府立成人病センター（編）、永井書店、大阪府、152-158、2009
29. 井上賢一、非浸潤性乳癌に対する薬物療法、乳癌の基礎と臨床、戸井雅和（編）、医薬ジャーナル社、大阪府、490-496、2009

30. 井上賢一、タキサンの役割、乳がんの標準化学療法の実、佐伯俊昭(編)、金原出版、東京都、11-14、2009
31. 奥原秀盛、死の受容過程理論、看護診断のためのよくわかる中範囲理論、黒田裕子(編)、学習研究社、東京都、205-212、2009
32. 吉田隆子、子どもたちに生きる力を一食育からのインプリンティティンクが健康への投資一、カラダの百科事典、日本生理人類学会(編)、丸善、東京都、116-120、2009
33. 吉田隆子・せべまさゆき(絵)、「やさいだいすきひみつのごはん」、はじめての食育クッキングえほん、金の星社、東京都、2009
34. 吉田隆子・せべまさゆき(絵)、「うどんはどこからきたの」、はじめての食育クッキングえほん、金の星社、東京都、2009
35. 吉田隆子・せべまさゆき(絵)、「4つのおさらでげんきになあれ」、はじめての食育クッキングえほん、金の星社、東京都、2009
36. 青木和恵、全身状態と褥瘡 がん終末期、実践に基づく最新褥瘡看護技術、真田弘美・須釜淳子(編)、照林社、東京都、2009
37. 稲野利美、症状で選ぶ!がん患者さんと家族のための抗がん剤・放射線治療と食事のくふう、女子栄養大出版部、東京都、2009
38. 山口建、他(「がんの社会学」に関する合同研究班)、「がんよろず相談 Q&A 第5集 乳がん編②」、静岡県、2009
39. 山口建、他(「がんの社会学」に関する合同研究班)、「学びの広場シリーズ⑥ 緩和ケアとは?」(小冊子)、静岡県、2008
40. 山口建、他(「がんの社会学」に関する合同研究班)、「学びの広場シリーズ⑦ がんと上手につきあう方法」(小冊子)、静岡県、2008
41. 山口建、他(「がんの社会学」に関する合同研究班)、「学びの広場シリーズ⑧ 患者・家族のコミュニケーション」(小冊子)、静岡県、2008
42. 山口建、他(「がんの社会学」に関する合同研究班)、「学びの広場シリーズ⑨ 痛みをやわらげる方法」(小冊子)、静岡県、2008
43. 山口建、他、がんの社会学-DPC 時代の次に何がくるのか?、がん医療の質に挑む DPC 時代のチャレンジ、グローバルヘルス研究所(編)、日本医学出版、東京都、57-72、2008
44. 山口建、他、「がんの時代」における家庭医の役割、地域で支える患者本位の在宅緩和ケア、片山壽(編)、篠原出版新社、東京都、40-54、2008
45. 永井宏和、ホジキンリンパ腫、Cancer Treatment Navigator、中川和彦(編)、メディカルビュー社、東京都、206-207、2008
46. 山下浩介、がんに負けない!(小冊子)、北海道、2008
47. 安達勇、吉川栄省、他、緩和ケアチームの経緯と活動 静岡県立静岡がんセンター、緩和ケアチームの立ち上げ方・進め方、森田達也・木澤義之・戸谷美紀(編)、青海社、東京都、14-16、2008
48. 子どもは自分の死をどう見つめるか-死に直面した子どもたち、子どもと思春期の精神医学、中根晃・牛島定信・村瀬嘉代子(編)、金剛出版、東京都、105-110、2008
49. 山口建、他(「がんの社会学」に関する合同研究班)、「がんよろず相談 Q&A 第4集 乳がん編①」、2008
50. 山下浩介、がん患者・家族のケア、北海道、2008
51. 安達勇、他、緩和ケアチームの経緯と活動 静岡県立静岡がんセンター、緩和ケアチームの立ち上げ方・進め方、青梅社、東京都、14-16、2008
52. 吉田隆子、「食育の大研究」、「食育」の大研究-からだにいい!おいしい!楽しい!栄養バランスから料理まで、PHP、東京都、79、2008
53. 山口建、吉田隆子、稲野利美、石川睦弓、他、がん患者さんと家族のための抗がん剤・放射線治療と食事のくふう、女子栄養大学出版部、東京都、2007
54. 佐々木常雄、抗がん剤の作用・副作用がよくわかる本、主婦与生活社、東京都、2007
55. 佐々木常雄、「もう治療法はありません、三ヵ月命とと思ってください」と医師から言われたベッドサイドでの一言、日本医事新報社、東京都、2007
56. 大野真司、他、乳がん患者のこころと身体を支えるチーム医療:明日から役立つ乳がんチーム医療、大野真司、笠原善郎(編)、1-14、金原出版、東京都、2007
57. 井上賢一、他、科学的根拠に基づく乳癌診療ガイドライン1 薬物療法 2007年度版 日本乳癌学会/編、金原出版、東京都、1-160、2007

58. 安達勇、他、本邦での緩和ケアチーム活動の実際（2）静岡県立静岡がんセンター、すぐに役立つ緩和ケアチームの立ち上げと取り組みの実際、真興交易(株)医書出版部、東京都、45-55、2007
59. 大庭章、吉川栄省、怒りへの対応、がん医療におけるコミュニケーション・スキル、内富庸介・藤森麻衣子（編）、医学書院、東京都、2007
60. 大庭章、吉川栄省、不安への対応、がん医療におけるコミュニケーション・スキル、東京都、医学書院、2007
61. 青木和恵、緩和ケアとしての褥瘡ケア、がんのリハビリテーション、辻哲也（編）、メジカルフレンド社、東京都、2007
62. 青木和恵、全身状態と褥瘡 がん終末期、最新褥瘡看護技術、真田弘美・須釜淳子（編）照林社、東京都、2007

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許の出願
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

成果の刊行に関する一覧表【平成19～21年度】

雑誌：外国語

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Hyodo I, <u>Adachi I</u> , et al.	Development of a predicting tool for survival of terminally ill cancer patients	Jpa J Clin Oncol	1	2-7	2010
<u>Nagai Y</u> , et al.	The Influence of informing patients about cancer on their quality of life in gastric, lung, and colorectal cancer patients in japan	Quality of Life Research		A-96	2009
Morita T, <u>Suga A</u> , et al.	Meaninglessness in terminally ill cancer patients: a randomized controlled study.	J Pain Symptom Manage.	37	649-58	2009
Takeuchi H, <u>Tashiro H</u> , et al.	Clinicopathological characteristics of recurrence more than 10 years after surgery in patients with breast carcinoma	Anticancer Res	29	3445-3448	2009
Kobayashi K, <u>Yamaguchi K</u> , et al.	Effects of socioeconomic factors and cancer survivors' worries on their quality of life (QOL) in Japan.	Psycho-Oncology	17	606-611	2008
M Miyashita, <u>I Adachi</u>	Nurse views of the adequacy of decision making and nurse distress regarding artificial hydration for terminally ill cancer patients: A nationwide survey	Amer J Hospice & Palliative Med	24-6	463-469	2008
<u>Yamaguchi K</u> , et al.	Cancer patients' distresses and inquiries - proposal of four-level classification based on consultation service and questionnaire survey.	Cancer Sci	98	612-616	2007
Miyashita M, <u>Adachi I</u>	Physician and nurse attitudes toward artificial hydration for terminally ill cancer patients in japan: results of 2 nationwide surveys.	Amer J Hospice & Palliative Med	24-5	383-389	2007

成果の刊行に関する一覧表【平成19～21年度】

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Inagaki M, Yoshikawa E, et al.	Smaller regional volumes of brain gray and white matter demonstrated in breast cancer survivors exposed to adjuvant chemotherapy.	Cancer	109	146-156	2007
Inagaki M, Yoshikawa E, et al.	Regional cerebral glucose metabolism in patients with secondary depressive episodes after fatal pancreatic cancer diagnosis.	J Affect Disord	99	231-236	2007
Ito Y, Ohno Y, et al.	Cancer survival trends in Osaka, Japan: the influence of age and stage at diagnosis	Jpn j clin oncol	37	452-458	2007

雑誌：日本語

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
山口建	高度先進医療・患者視点の重視を両輪に 「地域に根差した病院」を実現	がん治療最前線	67	3-7	2010
永井宏和	難治性悪性リンパ腫の治療戦略-再発・治療抵抗性濾胞性リンパ腫	血液フロンティア	20	21-28	2010
永井宏和	リツキシマブ導入後のB細胞性腫瘍治療-未治療B細胞性リンパ腫治療におけるリツキシマブの有用性：国内一般診療データに基づく検討	血液・腫瘍科	60	6-10	2010
東さやか、森本茂文、田伏克惇、他	TS-1 適正使用確認システムの構築とその応用	癌と化学療法	37	469-472	2010
安達勇、他	末期がんだけではない「緩和ケア」は、ここまで進化した	ナーシング・カレッジ	2	44-50	2010
安達勇、本山清美	外来がん化学療法患者に対する緩和ケア	がん患者と対症療法	2	33-39	2010
山口建	多職種チームの医療の実践	Oncology Network	2	3	2009

成果の刊行に関する一覧表【平成19～21年度】

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
山口建	がん医療現場での Quality improvement を考える -患者参加型医療への対応-	安全医学	5	5-11	2009
濃沼信夫	介護予防の評価. 医療経済学・政策学の視点から	公衆衛生	73	286-289	2009
濃沼信夫	がん検診の現状と問題点	日本医師会雑誌	138	43-46	2009
濃沼信夫	胃癌撲滅戦略による経済効果	Helicobacter Research	13	380-384	2009
濃沼信夫	分子標的薬の医療経済	日癌治	44	232	2009
濃沼信夫	胃癌の医療経済	The Forefront	5	33-36	2009
濃沼信夫	がん診療の医療経済学. がん薬物療法学 基礎臨床研究のアップデート	日本臨床	67	17-24	2009
大友理恵子、 柴光年、他	化学療法中の食欲不振患者 への食事援助 -化学療法食を考案して-	全自病協雑誌	48	116-119	2009
望月泉	がんの病診連携	治療	91	2382-2388	2009
松山円、石田裕二、 大曲睦恵、他	【病児のきょうだい支援】 看護支援の実際 自宅から離れた場所で治療を 受ける患児のきょうだいへの 説明	小児看護	32	1316-1322	2009
石田裕二、 大曲睦恵、他	family-centered-care を 目指してのチーム医療： 『チャイルドライフ スペシャリストと小児科医の 連携』	日本小児科学会誌	110	134	2009
佐々木常雄	生と死を見つめて	Modern Physician	29	1501-1504	2009
佐々木常雄	終末期における心のバトン	訪問看護と介護	4	366-371	2009
佐々木常雄	医療のピットフォール がん緩和医療での告知と インフォームドコンセント (解説)	治療学	43	441-443	2009

成果の刊行に関する一覧表【平成19～21年度】

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
小西敏郎、 佐々木常雄	アンケート調査からみた 再発・進行がん患者の疼痛 管理における主治医の役割の 重要性	癌と化学療法	36	453-460	2009
佐々木常雄	都道府県がん・地域がん診療 連携拠点病院	日本臨床	67	544-549	2009
永井宏和	リンパ系腫瘍 -新 WHO 分類 (第4版) は どのように変わったか- 成熟 B 細胞腫瘍	臨床血液	50	244-252	2009
味澤篤、 永井宏和、他	エイズ関連非ホジキンリンパ 腫(ARNHL)治療の手引き Ver 1.0	日本エイズ学会誌	11	108-120	2009
永井宏和	悪性リンパ腫治療の進歩 -限局期症例は治癒可能か	Current Therapy	27	23-26	2009
片岡明美、 大野真司	30歳以下の若天性乳癌の 臨床病理学的解析と結婚・ 出産に関する検討	乳癌の臨床	24	39-42	2009
中村吉昭、 大野真司、他	外来がん化学療法における チーム医療と外科	臨床外科	64	1225-1233	2009
長井吉清、他	病名告知のクオリティオブ ライフへの影響	癌の臨床	55	389-393	2009
上田由喜子、 長井吉清、他	がん患者の希望に関する 意識構造	Health Sciences	25	212	2009
細川治、 宮永太門、他	早期胃癌診断の現状	胃と腸	44	455-464	2009
大田洋二郎	がん患者を支える口腔ケアと 歯科治療	The Quintessence	28	146-157	2009
大田洋二郎、 上野尚雄	外来治療を受ける患者への 口腔ケアの重要性	外来看護最前線	14	66-76	2009
大田洋二郎	がん患者さんも安心して 使える口腔ケア商品	消化器外科 NURSING	14	4-7	2009
大田洋二郎	がん患者への口腔ケアの 実践	訪問看護と介護	14	912-916	2009
大田洋二郎	がん患者を地域で支える 医科・歯科連携の実際	地域連携 network	2	112-118	2009
小池真規子	病む子どもの傍らで	臨床心理学	9	341-345	2009